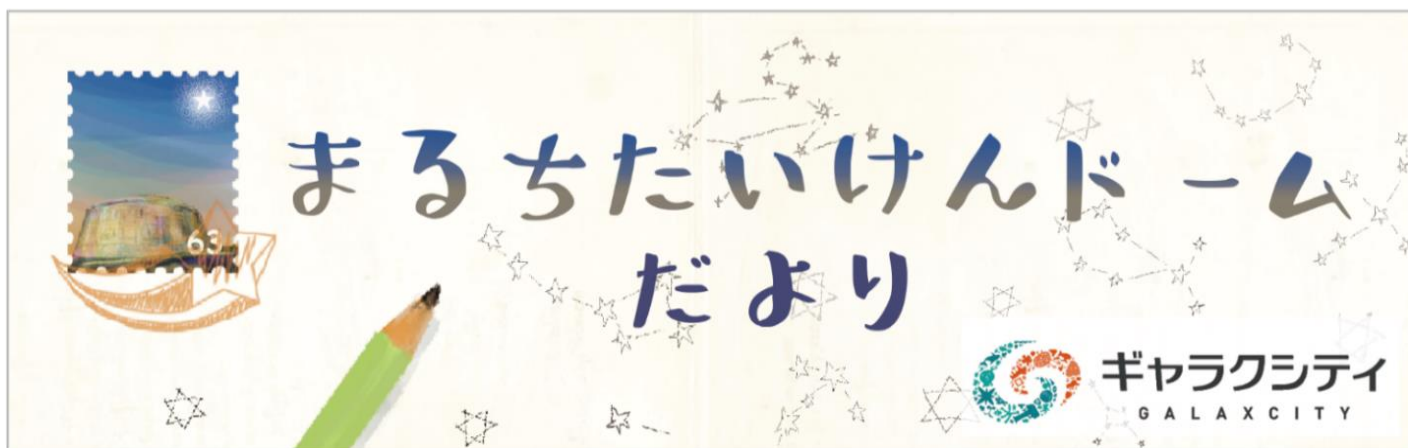




オリオン大^{せいいうん}星雲を見よう～その^{しょうたい}正体

オリオン星雲の位置^{い ち}に何となくぼーっとした雲のような天体があることは、望遠鏡^{ぼうえんきょう}が発明^{はつめい}される前から知られていました。発明されてすぐの頃^{ころ}（17世紀^{せい き}）の望遠鏡でもこの星雲はよく見えるので、すぐに星雲^{ネ ビュラ}（Nebula）と呼ばれるようになりました。その後も続々と、「星雲」が発見されます。アンドロメダ星雲（M31）、球状星団^{きゅうじょう}（M13やM3）、おうし座のカニ星雲（M1）や、こと座のリング星雲（M57）などです。これらは新たに彗星^{すいせい}を搜索^{そうさく}する際に、見間違えやすい天体として、リストされたものです。日本では明治時代になって Nebula の訳語^{やくご}として「星気^{せい き}」とか「星霧^{せい む}」とか呼ばれましたが、1920 年代ころまでには「星雲^{とういつ}」に統一されました。

天の川が暗い星の集まりであることは、望遠鏡の発明ですぐに解明^{かいめい}されましたが、星雲が何であるか判然^{はんぜん}としてきたのは、天体写真の撮影^{さつえい}と天体からの光を色^{はちよう}（波長^{ぶんかい}）に分解する分光^{かんそく}（スペクトル）観測が行われるようになる 1890 年代のことです。オリオン星雲の場合、星からの光とは違って、温度の低い気体からの光の特徴が強く見られます。一方、アンドロメダ星雲の場合は、星の大集団^{しゅうだん}のような特徴が見られます。こうして、星雲にはいくつもの種類^{しゅるい}があることが分かり、今ではオリオン星雲は「散光星雲^{さんこう}」の1つに分類^{ぶんるい}されます。また、アンドロメダ星雲は、銀河系^{ぎんがけい}の外にある星の大集団であることが分かり、「アンドロメダ銀河」と呼ぶことになりました。

PLATE VIII



PHOTOGRAPH OF THE NEBULA NEAR 42 ORIONIS
By A. Ricco, Catania Observatory

1895 年 4 時間の露出^{ろしゅつ}時間をかけて撮^とら
れたオリオン星雲 A. Ricco ApJ, 2, 164